
THE FACTORY

絵馬 真一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE FACTORY

【Nコード】

N7806Z

【作者名】

絵馬 真一郎

【あらすじ】

ごくありふれた青年である江戸川啓司。しかし彼の家の近くにある工場での不思議な体験を境に特殊な力を持つことになる。

工場

僕の名前は江戸川啓司。ごくありふれた普通の大学生1年生だ。大学に通うために実家を離れ、とある街で一人暮らしをしている。最近の悩みといえば住んでいるアパートのすぐ近くにある工場の騒音のおかげで眠れないということくらいだ。しかもこの騒音、自己中心的なことに夜だけゴウゴウと鳴り響くから困ったものだ。まあ一般人の感覚からすれば騒音というほどの音ではないのかもしれないが、僕の耳は神経質な作りなのだ。しかし悩みという悩みがこれくらいしかないなんて呑気なやつだと思つづく自分でも思う。こんな呑気で平凡な僕の身に不運とも言つべき出来事が降りかかることとなる。

2011年12月1日

「ああ、耳が痛い。」そう言いながら僕は騒音対策用の耳栓を取る。いつも通りサツパリしない寝起きだ。12月初旬ともなると朝も寒くて布団から出たくなるものだ。しかし今日は9時から大学の講義がある。「時間の流れが遅くなつてくれればなあ……。」なんて願ってもかなわないような無駄なことを考えながら渋々布団から出る。僕の朝は毎日決まっている。まず最初に浴槽にお湯を張る。温まるためでもあるがそれ以上に目が覚めるからだ。次にやるのはテレビを付けることだ。耳が神経質だなんて言いながら全く無音とというのは落ち着かない。これも夜の騒音の所為だろうか。「今日は平年より冷え込み……。」

毎日天気予報だけには耳を傾ける。政治家の汚職事件や殺人事件なんて全くもつてどうでもいい。ただのBGMにすぎない。もつとも、それが自分に関係するようなニュースだったらチェックするのだろうけど。

天気予報に耳を傾けながら僕は昨日買っておいたチョコレートをコンビニ袋から取り出し、朝食として食べる。僕の朝食は必ず甘いものと決まっているのだ。なぜかという理由はないが、一人暮らしを始めてからは毎朝甘いものを食べている。そしてインスタントコーヒー。これは単に目をさますための目的で飲んでいるが、正直なところここ最近飽きてきている。

「おつといけない。」飲んでいたインスタントコーヒーを飲み干し、おそらく溢れているであろう浴槽のお湯を止めに早足でユニットバスルームへ向かう。「ああ、またやつちやった……。」「そうつぶやきながら蛇口をひねる。一人暮らしを初めてからこれで5度目だ。幸い我が家は1階なので下の階に浸水するということはないが、自分の学習能力のなさにはとほとと呆れ返る。

水浸しになった床を拭いていたお陰でゆっくり湯船に浸かる時間もなく、ふと時計に目をやると8時38分。僕の家から大学までは徒歩10分程度なので、残り時間は約10分ということになる。急ぎ気味に服を着替え、歯を磨いて家を出る準備をする僕。そして玄関で靴を履き、家を出て鍵をかける。毎日目にする光景だが、まさきに目に入るのは僕の快眠を邪魔する工場の姿だ。「全く、騒音出すなら夜じゃなくて昼間にしろよ。」そうつぶやきながら早足で大学へと向かう。

それにしてもこの工場、一体何のための工場なんだろう。雲色でこつこつしたコンクリート造り。まさに工場という感じの外観ではあるが、そこに入っていく人や出ていく人を僕は一度も目にしたことがない。夜中に騒音を出しているんだから廃工場というわけでもないだろう。もしかしたら外観は工場に見えても実際は工場とは別の施設なのかもしれない。こんな感じでいつも同じ事を考えながら大学に到着する。

「おい、起きろよ。」背中をトンと叩かれ、ふと目が覚めた。「もう授業終わってんぞ。」ハハ、と笑い混じりに僕を起こしたのは友人の四田光一だ。彼はこの大学の入学式でメールアドレスを交換して以来ずつと友人関係を保っている数少ない友人の一人で、僕と同様この大学の近くで一人暮らしをしている。「……ああ、もう終わったんだ……。」今日はいつもより眠っていた時間が短い感じがしながら目を擦る僕。「お前、毎回この授業寝てるよな。」「まあ、この授業興味ないし、寝ててもいいかなって。でも出席だけはしておかないとね。」「そう、僕はこの授業に寝に来ている。寝るならわざわざ大学まで来ないで家で寝ていたらいいじゃないかと思うかもしれないが、そうはいかない。この授業は出席が重要な授業、簡単にいえば教授の言うことを聞き流していても、寝ていてもいいからとにかく授業に出席さえしていれば単位がもらえる授業なのだ。」

「俺もうこのあと授業ないからさっさと帰るわ。」「そう言って寝ぼけ眼の僕に軽く手を振って富山は帰っていった。僕の方とは言うところ、このあとも午後4時半まで授業が詰まっている。休憩時間は15分。遅刻というものが嫌いな僕は特に寄り道もすることなく教室を移動する。」

午後4時40分

そんなこんなでいつも通り授業も終わり帰路に着く僕。帰り道に必ず寄るのが大学をですぐにあるスーパーだ。ここで夕食と翌日の朝食を買う。次の日に大学がなければ次の日の昼食分も買う。ここはこの街でも有名な激安大型スーパー。バイトもしないで親からの仕送りだけで生活する僕には必要不可欠なものなのだ。

買う食品はその日の気分で決めている。とは言っても料理はできないからいつも弁当かカップ麺ということになるが。明日も大学があるから買うのはから揚げ弁当と朝食用のチョコレート、そしてパッくのお茶。「ありがとうございました。またお越しくださいませ。」

「僕はレジを済ませスーパーを出る。

僕は特に急ぐということもなくまたいつも通り我が家へと足を進める。そしてまた目に入ってくるのが例の工場。大学から5分も歩けば徐々に人影が少なくなっていく、工場が目に入る辺りまでくれば昼夜問わず全く人影がなくなる。僕一人だけがそこを歩き、まるでこの地を手に入れ支配しているような奇妙ともいうべきこの感覚は僕の小さな楽しみでもある。

しかし今日はなんだか様子が違う。それもそのはず、その冷たい大きなコンクリートの建造物を見る男がいるのだ。背丈はやや大きめで約175〜180?、太っているというわけでも痩せているというわけでもなく、黒いスーツに真っ赤なネクタイを雑にしめている。何より目立ったのはマスクとサングラス、そして目が痛くなるような金色をした髪だ。この時期だからマスクを付けていても何らかしいことではないが、日も暮れかけて薄暗くなっているにもかかわらずサングラスというのは明らかにおかしい。怪しい。とても怪しい。

男は工場のほうを身動きひとつせず見つめている。この工場の中に何かあるのかはわからないが強盗でもしようとしているのだろうか。何にせよこの工場で事件なんて起こされたらたまったものじゃない。パトカーのサイレンやなんかで僕の睡眠をこれ以上妨害されるのはまっぴらだ。とは言ってもこんな何をするか分からない怪しい男に話しかけるのも気が引けるし、もしかしたらただ工場に興味があるだけのちょっと変わった人なのかもしれない。

心配のしすぎだと自分を納得させながら男のほうには目を向けずにそろそろと歩き始める。「君、この近くに住んでるの?」男の背後を通りすぎようとした瞬間男が言った。「え?は、はい一応……」男のあまりにも素早い振り返りにビクッと驚きながらも僕は答えた。「そうなんだ。今日の夜中、ここで素晴らしいものが見れるよ。冷たく若い、どこかで聞いたことのあるような声で男は言った。

やっぱりこいつ何か起こすつもりだ！僕の勘は間違っていない！そう思いながら無言で足をすめる僕。振り返りはしなかったが、歩いている間、背後に尖った氷のような視線を感じながら僕は帰宅した。

あの男の言う通りならば今日必ず何かが起きる。警察に連絡するべきだろうか？だが僕一人が連絡したところで警察が動くほど暇じゃないだろう。それにたとえ工場で爆発なんかが起こったとしてもこのアパートに被害が及ぶほどの距離でもないし。そう考えることにした。僕は自分を納得させるのが上手いのかもしれない。

「今日はもう寝よう。」いつもは夜中の0時に寝ることにしている僕だったが、今日は午後9時には寝る支度を始めていた。何かが起こる前に眠って夢の世界に浸っておこうという考えだ。耳栓をしてスピーカーからクラシック音楽を流し布団に入る。僕の住んでいる部屋の両隣、さらには上の階も空き部屋だから音量を気にする心配もない。ときどきこのアパートには僕しか住んでいないのではないかと思うこともあるが、それはそれでいい。

ハツと高いところから落ちるような感覚に目が覚めた。真つ暗な部屋で携帯電話を開き時間を確認する。午前1時。「……何かおかしいな。」何か異変を感じる。違和感といったほうが適切かもしれない。「……音がない。」そうだ。いつもなら耳栓越しにもうつすらと聞こえるあの騒音が聞こえないのだ。布団から抜け出し工場がどうなっているのか、カーテンを開いて確認してみたが見た目からは特に異変は感じられない。僕はこの胸騒ぎを抑えるために明かりをつけテレビのリモコンを押す。テレビはいつも通り深夜アニメが流れているだけだった。

「何が起こるんだよ……。」居ても立つても居られなくなった僕は上着を着て外の様子を見に家を出た。玄関を出てすぐ目に入る工場だが、やはりいつも通りの姿だ。だが音がないというのは、何か悪いことの予兆のようで気味が悪い。そして工場に吸い寄せられる

かのように僕は歩いた。気がつけば目の前には「関係者以外立入禁止」の立て札。その奥5メートルほど先には工場の大ささには見合われないような小さな車庫扉程度のガレージ式入口が見える。こんなに近くで見るのは初めてだったからか、変な緊張感があると思いつ僕は銅像のようにその場に立ち尽くしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7806z/>

THE FACTORY

2011年12月25日03時50分発行